

目次
 練習 2
 楽しさ 5
 写真 14

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

onタイムoffタイム 6
 商況 6 7
 KODOMO 11 12 13

新買言利

2012/8/17 (火)

発行所 読売新聞大阪本社 〒530-8551 大阪市北区野崎町5-9 電話(06)6361-1111(代)

梶井基次郎 大阪生まれ。旧制三高を経て東大中退。「城のある町にて」「Kの昇天」など短編20編余りを残した。「檸檬」の中で、「えたいの知れない不吉な塊」にとらわれた「私」は、1個のレモンを爆弾に見立てて洋書店の書棚に置く。近代の倦怠(けんたい)と絶望を描いたとされる。(写真は1931年撮影、日本近代文学館提供)



近代日本文学を代表する短編小説「檸檬」の創作過程で書かれた、梶井基次郎(1901-32)の小説「瀬山の話」の自筆原稿74枚が見つかった。専門家らも長年見ることがなかった幻の原稿で、実践女子大学が東京・神田の古書店から購入、今年中にも公開を予定している。

「檸檬」原型 幻の自筆稿

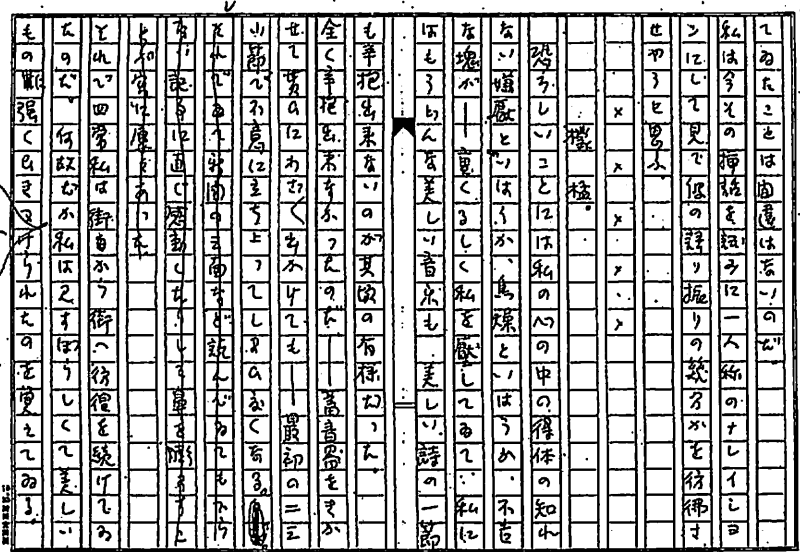
梶井基次郎「瀬山の話」

「瀬山の話」は、梶井が東京帝大文学部英文学科に入学した1924年(大正13年)、仲間と創刊した同人雑誌「青空」第1号に掲載するために書いた。京都で学生生活を送る「私」の独白と、

「私」が友人・瀬山極に代わって一人称でつづる部分

推敲重ねた跡

年内にも公開



品はまとまらず、瀬山側の挿話にある「檸檬」を短編小説に書き直して載せた。梶井はフランスの画家ポール・セザンヌにちなんで「瀬山極」をペンネームとして使ったことがあり、瀬山は梶井の分身とも読める。

原稿を調べている実践女子大学の棚田輝嘉教授と河野龍也専任講師は、「傑作が生まれるまでの苦闘が伝わる。後半は書き直しが増えるが、前半の『檸檬』はあまり直しておらず、この原稿以前に『檸檬』の下書きがあった可能性もある」と話す。

「瀬山の話」は、梶井が31歳で没した翌年、友人の文芸評論家・淀野隆三氏が校訂し、遺稿として雑誌「芸」(改造社)に掲載。自筆稿は、67年に止くなった淀野氏が当初は保管していたとみられるが、その後所在がわからなくなった。

自筆稿は、400字詰め原稿用紙に万年筆で書かれ、随所に推敲の跡がある。梶井が捨てた部分にも、後の名作「檸檬」の「下には」につながる重要なモチーフがある。推敲の跡を精査すれば、梶井の多面性や作家としての可能性をより深く論じうる一助としている。

用字(実践女子大提供)